

神学・組織神学専攻（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第1外国語（英語）

試験時間：（60）分

I. 次の英文を読んで、以下の問いに答えなさい。

- ① 聖餐式において、十字架につけられ復活したキリストは、目に見えない仕方現実、愛をもって、すべての人々のために御父に自分自身をささげ、神秘的にも真実に、ご自身のささげものへと、すべての人々を引き寄せる。
- ② 聖餐式の挙行、他の秘跡の執行、そしてそれ以上に、聖餐式の挙行において、そして聖餐式の挙行を通して、この上なく、キリストは典礼に参加する信徒だけでなく、すべての人間、そして実に、全被造物の世界のために、大祭司として仲介する役割を担い続ける。

II. 次の英文を読んで、以下の問いに答えなさい。

神学専攻（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：専門科目（カトリック神学の基礎知識についての筆記試験）

試験時間：（60）分

◇問1の解答例

カトリック教会では、聖書・聖伝・教導職を三つの独立した権威源泉として並列するのではなく、神の啓示が聖霊の働きのもとで教会の中に生き続ける一つの出来事であると理解している。

神の啓示はキリストにおいて最終決定的に人類に与えられたが、使徒たちはイエス・キリストから受けたその啓示を、説教・生活の模範・制度などによって伝え、同時に聖霊の靈感のもとで聖書を書き記した。このように聖書は、キリストにおいて実現した救いの知らせを全世界に伝える使徒たちの共同体の中で書かれた神のことばであり、その共同体すなわち神の民であるキリストの教会によって代々伝えられ、理解され、宣言され、生活のうちに証しされ、典礼の中で祝われてきたのである。そのため、このような教会の生きた伝統全体、すなわち聖伝から、聖書のみを切り離すことはできないと理解されている。それ故に、聖伝と聖書（旧新約両聖書）とは神という同じ源から流れ出ているものとして、互いに密に結びつき、通じ合っているとされるのである。

ここで重要なのが、聖書も聖伝も同じ聖霊の働きによるということである。すなわち、靈感を与えることによって聖書を書かせた聖霊が、福音を代々伝えていく使徒的教会のうちに働くことによって、その聖伝は生きたものとして発展してきたのである。

この神の民の生きた伝統のなかで神のことばが伝えられていくために、使徒たちは後継者として司教たちを残し、彼らに自分たちの教導職を伝えた。変遷していく時代の中で、教会の教導職は託された信仰の遺産を損なうことなく保ち、正しく解釈し、各時代において様々な困難を抱える人類の状況を考慮しつつ忠実に説明してきた。この教導職は、神のことばの上にあるものではなく、これに奉仕するものであり、聖霊の助けによって行われる。

以上のように、聖伝と聖書および教導職はどれも同じ聖霊の働きによって実現するものであるため三者間において矛盾することはなく、むしろ結びつき協力し合っており、互いにとって欠かすことができないものとなっている。こうして神の啓示は、過去に完結した教義の集合としてではなく、ご自分が愛する民に語られる神の生き生きとした福音として、聖霊によって教会と全世界のうちに絶え間なく響いているのである。

◇問2の解答例

ヨハネ福音書では人間の救いのために愛ゆえに、父なる神がひとり子を世にお与えになったことが記されている。その一方で、ヘブライ人への手紙は、イエス・キリストが「神の子」でありながら、「あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われた」とし、そこにキリストが持つ祭司職の基盤を見出している。すなわちこの二つの聖書箇所から、神の御子が受肉によって、罪を除く人間性のすべてを引き受け、人間の生にとって避けることのできない苦しみという現実にも参与したからこそ、キリストは神の最愛のひとり子として御父を人類に啓示しつつ、同時に弱さを抱える人類を代表して御父の前で自らをいけにえとして捧げることによって人類のためにとりなしを行ったということが分かる。ここに、御子の受肉とキリストの祭司職、すなわち神と人との仲介者としての役割の関係が示されている。

このことに関して、教皇フランシスコは回勅『主はわたしたちを愛された』62項において、教父たち

がどのように神学的考察を深めていったのかを示している。ここでは、受肉した神の御子キリストは、真に人間的感情（悲しみ、恐れ、苦悩など）を経験したということが強調されている。それにより、ヘブライ人の手紙でも描かれているように、キリストが人間の弱さに同情できない方ではないということが示される一方で、わたしたち人間もまた苦しみや悲しみの試練に遭う時に、いつくしみ深い神が共に歩んでくださるということを信じるのできるのである。

同時に、ダマスコの聖ヨハネによると、キリストは人間本性を構成するすべての要素を引き受けることによって、それらすべてを聖化された。すなわち御子の受肉とは単に「神が人となった」ということだけとどまらず、神と人との仲介者であるキリストにつながることに於いて、人間という存在が体験する生の全領域、すなわちその感情、弱さ、そして死さえも、いつくしみ深い神との交わりの場として開かれたという出来事となるのである。

組織神学専攻（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第2外国語（ラテン語）

試験時間：（60）分

問題1

問題2

まことにわれわれは、ちょうどより簡単な事柄から始めることで学習がよりふさわしいものとなるように、複合的な事物から諸々の単純な事物の認識を受け取り、より後の事柄からより先の事柄へと進まなくてはならないのであるから、存在者〔在るもの、有〕の意味から本質の意味へと進むべきである。

問題3